

双十国慶節をなぜ祝うのか

中国の「政治神話」から解放されるべき台湾国民

本誌編集部

台湾支配の道具―辛亥革命神話

台湾では今年も中華民国の建国記念日に相当する十月十日の「双十国慶節」を迎えるが、この日の意義については

「一九一一年十月十日、中国湖北省で孫中山（孫文）先生が指導する革命軍が武昌起義を行い、辛亥革命が始まった。そしてその結果、中華民国が成立した」といった説明がなされている。

だが実際孫文は、革命など指導していない。当時の革命派の主流は反孫文派で、人徳に欠ける孫文は追放された形で米国におり、革命には一切関与していない。武昌事件も反孫文系の結社が起こした反乱で、その後、全国に広がった革命戦争の主力は、革命派より

も清国軍の反乱部隊だ。革命後、確かに孫文は一時、中華民国臨時政府の大總統に担ぎ出されたが、実際に清国皇帝を退位させ、中華民国を正式に建国したのは、清国総理の袁世凱である。

かくて中華民国は袁世凱の系統の北洋軍閥が支配する国家となったが、それを国民党の蔣介石が北伐を行って乗っ取った。その後、蔣介石政権は支那事変で劣勢となり、汪兆銘が新たに有力政権を作ったため、自政権の正統性を強調すべく、党の創始者孫文を「国父」として神格化し、その革命伝説を創作した。それを記念するために制定したのが、双十国慶節だった。いかに中国的な歴史捏造の産物といえる。もっとも国民党が中国において、い

かようにウソの歴史を書こうとも、それは彼らの勝手である。だが問題は戦後、台湾に逃亡した国民党が、このような記念日を持ち込んだことだ。

国民党は独裁支配に喘ぐ台湾人の反抗を防ぐため、孫文革命賛美の宣伝、洗脳を行うなど、中国人化政策を強行した。つまり日本時代の段階で、すでに支配者である中国人よりはるかに高い近代文明を具備していた台湾人に、こうした馬鹿げた政治神話を徹底的に叩き込み、中華民国への忠誠心を植えつけたのだ。かくして台湾人は中国人意識を抱き、孫文を世界最高の偉人と信じ、その革命の後継者として、国民党支配を光榮とするまでに至った。これは恐るべき愚民教育である。そしてその年に一度の集大成が、双十国慶節の祝賀行事だったのだ。

民主化後、台湾人意識が擡頭し、中国とは関係のない台湾人国家の建設を求める世論が主流となって今日に至っているが、かの政治神話はなお生きて

おり、双十国慶節は健在だ。国民一般では蔣介石の権威はすでに否定されているが、孫文の権威については疑問すら持たれていない。だが、こうした状況を克服しない限り、中国人に対する台湾人の屈服心理の完全払拭は困難だ。そして、そうした心理こそが中華人民共和国、そしてそれと連携する国内の統一派など「台湾の敵」への抵抗力を確実に殺いでいるのである。

陳水扁総統は「中華民国はすなわち台湾。台湾はすなわち中華民国。これは何人たりとも否定できない」と、昨年の双十国慶節で述べているが、いかに世界に向けて「台湾は台湾だ」と強調しても、「我々は中国人だ」と言っていることに変わりはない。台湾が「中国」の看板を放棄しないがために、それが中華人民共和国に台湾併呑の口実となっているのだ。

周知のように、彼の国においても孫文は、「中国近代革命の父」として神格化されている。

台湾人覚醒の呼びかけ

二年前の八月、李登輝前総統は、中華民国から台湾国への改変を目指す台湾正名運動を本格的に発動するにあたり、「中華民国はすでに存在しない」と明言した。そして九月六日、二十万人の人々が台北市内において台湾正名デモを行った。ついで昨年二月には二百二十万人の人々が「手護台湾」運動に参加した。ところが、これら運動の一部始終を熱心に実況中継したテレビ局でさえ、国慶節には各地の祝賀行事をお祭り気分報道しているのだ。

台湾人がこの歴然たる矛盾を矛盾と感じない限り、今後も若い「愚民」は続々と輩出され続けることになる。日本でも毎年十月十日には、祝賀行事が行われ、多くの日本人が参加して台湾支持を表明するが、真に台湾人の幸福を願うのなら、「中国の誕生日」などを祝うより、むしろ中国の政治神話から解放されない台湾人に対し、覚醒

を呼びかけなければならないはずだ。

上記の台湾正名デモには、日本李登輝友の会も公式訪台団を組んで参加した。そのとき、李登輝前総統に贈った小田村四郎団長（現会長）の激励のメッセージを最後に紹介したい。

（台湾が自ら「中華民国」を名乗り、広大な中国大陸を自らの版図とする「一つの中国」の原則を放棄せず、また少なからぬ国民が自らを「中国人」と規定して怪しまない現実がある以上、我が国政府が姿勢を転換することは非常に困難であることも事実です。（略）

日本人から見れば台湾人はあくまでも台湾人であり、中国人とは明らかに異なっております。そして世界の中でも優れた先進文明を身に付け、心の清らかな尊敬すべき民族なのです。是非とも台湾人自らがこのことに誇りを抱き、台湾へのアイデンティティをさらに強化し、堂々たる「台湾国」を築き上げることを心から期待しております。台湾万歳！